

乳癌の正しい理解を 広報げろ 2015.12

乳癌の正しい理解を

乳がんは女性のがんの中で最も多いものですがその死亡率は胃がん、大腸がん、肺がんより低く治りやすいがんといえます。

この秋、乳がんが話題になりましたが、気になるのは乳がんは痛いものという考え方です。乳がんのほとんどはしこりを作ってくるため、多くは自分で見つけることができます。自己発見のきっかけは、乳がん学会の統計では8割がしこりです。しかし、乳がんの9割は痛みを伴っていないという結果も出ており、特に早期では痛みはないと考えてよいでしょう。

しこりを発見するための自己検診はとても大切です。金山病院で扱った最近の乳がん100例で見るとその6割は自己発見で4割が検診です。自分ではわからないという人も多いのですが、とにかくよく触れてみることです。左右の同じ部位を比較して左右差があれば要注意ということになります。毎月生理が終わるころ、生理がなければ毎月日を決めて触診しましょう。異常を感じたら迷うことなく乳腺外来を受診し、異常がない人は乳がん検診を受けましょう。

画像診断は、まず最初にマンモグラフィとエコーで行います。日本人の乳房はマンモグラフィよりもエコーのほうががんを診断しやすいようです。頻度は少ないのですが、しこりを作らず微小な石灰化を有する乳がんはマンモグラフィでないと発見できません。画像診断を完全なものにするためには両方の検査が必要です。乳がんを疑うと細胞診や針生検、切開生検などで診断を確定します。現在まで金山病院の針生検ではがんの見逃しはありません。

乳房を温存する手術が増えていますが金山病院でも約4割が温存手術となっています。乳がんは、がんを取り除くことができれば乳房を残してもよいという考え方ですが、術後再発予防に放射線をかけなければならないこと、わずかながら残した乳房にがんの再発が見られることなどから乳房を全部取る手術を選択する方もおられます。なを、金山病院で行った手術例では現在まで温存した乳房にがんの再発はありません。

女性ホルモンの働きを抑える薬や抗がん剤による治療、長期にわたる経過観察も大切で、金山病院ではこれらに対しても通院治療できる身近な病院として力を入れています。

生存率について乳がんでは手術後5年以内に死亡することはほとんどないので10年生存率が使われます。金山病院でも病期Ⅱ以下では術後5年以内の死亡例はありません。この生存率は病期により決まっています。標準的な治療を行っている限り、手術する病院や手術法に左右されることはありません。転移、再発は癌細胞が全身に種をまかれることによって引き起こされ、これは病期によって決まっているからです。たとえば日本乳癌学会の統計では病期Ⅱの10年生存率は80%です。20%はがんが再発し死亡したということです。しかしこの数字は統計学的なものであり、個々の例によって異なっていると思ったほうが良いと考えます。

乳がんが治るがんであるためには早期発見が大切です。少しでも疑いがあれば検診を待つことなく乳腺外来を受診しましょう。今年9月以降金山病院乳腺外来は予約で混み合い皆さんの希望にこたえられていません。乳がん検診は1年を通じて行われていますので、比較的空いている年度の前半期もご利用いただきますようお願いいたします。

金山病院乳腺外来 古田智彦